

AHA 2023 Philadelphia 参加報告

千葉大学大学院医学研究院 循環器内科学 龍崎智子

この度、第 15 回 Travel Award for Women Cardiologist (JCS/TAWC) よりご支援を賜り、米国フィラデルフィアで行われた American Heart Association Scientific Sessions 2023 に現地参加させていただきました。

私にとって初めてのフィラデルフィア往訪でしたが、伝統的なストリートおよび歴史的建造物の中に新たな文化の融合が見られる素敵な街並みの中で、多くの学者が歩いているようなアカデミックな気風が漂う大都市でした。気温は歴史的な秋の高気温が連日報道された日本より幾分寒いのですが、ハロウィンの興奮冷めやらぬうちにクリスマスの準備が進んでおり、街を歩いているだけで本場のクリスマスマーケットを眺めることもでき、一足早い冬を感じることができました。

学会は世界最大の循環器病学会ということで世界中から多くの循環器学者が一堂に会しており、多くの魅力的演題に心を奪われました。初日の Future Science では、著明な専門家によって、来春から本邦にも導入されるパルスフィールドアブレーションの報告や有症候性心房細動に対する鼻腔内噴霧型 Ca 拮抗薬の RCT の結果報告などをされており、どれも新鮮で興味深く拝聴しました。学会最終日の Late Breaking では、超肥満患者における DC パッドの貼布位置の検討が報告されており、人種の多様性による問題の幅広さを感じました。脳卒中予防としてデバイスで発見される AF にどこまで抗凝固薬を導入していくか現在未解決の問題についても深い議論がなされており、私が普段から問題を感じている部分と重なり、とても有意義でした。

連日ご高名な先生方の発表を拝見する中、私は学会初日に左房収縮能と心原性脳塞栓症との関連について発表する機会を得ました。左室収縮能についてはありとあらゆる研究がなされる中、左房収縮能についての研究は少ないです。これは左房収縮能の測定が難しいという側面が大きいと考えておりますが、このたび CT にて自動で 3D 解析できるソフトが開発され、本研究へとつながりました。私たちの研究では、左房収縮能の低下は心原性脳塞栓症と既存の心原性脳塞栓症のマーカーと考えられているような左房径や年齢、持続時間などよりも大きく関係していました。会場では CT 撮影時の調律によって大きく収縮能が異なると、発作性か持続性心房細動かというバイアスがかかるのではないかという指摘があり、検討外でしたので帰国後に CT 検査時の調律ごとに再度解析を行いました。実際に指摘通り、調律ごとにカットオフとなる左房収縮能の値には差が見られ、新たな知見を得ることができました。

一方で、native の英語スピーチについていくことができずリスニング能力の不足によって、聞き取れなかった議論や質問したかったのに英語力の不足で聞けなかった内容があり、自身の語学力不足を痛感する出張でもありました。学会終了後には医局の先輩が留学中の NY にも足を延ばして挨拶に伺うことで、現地での生活の厳しさや裏側を知ることもでき、

今後の研究活動のイメージを膨らませることができました。

この度 AHA2023 への現地出席をご支援していただきました、日本循環器学会ダイバーシティ推進委員会の皆様、そして日ごろより私の研究活動をご支援下さる医局員はじめOB/OGの皆様にも深く感謝しております。今後よい形で恩返しできるように引き続き頑張ります。



近藤祐介准教授（左から4番目）と筆者（左から3番目）
千葉大学循環器内科不整脈グループ